

読本評判——『昔語松虫墳』六聽雨軒文化八年刊

横 山 邦 治

一
聽雨軒なる作者の手になる『昔語松虫墳』という上方製の読本がある。

半紙本六卷六冊、表紙は薄に松虫の図案を薄い紺地に濃く浮きあがらせており、題簽は表紙左肩に貼付してあって各巻異なった字体現表で「むかしかたりまつむしつか 卷之一〜六」と記す。見返しには松虫を入れる虫かごを図案化したものの中に、

○復 聽雨○○○○○

讐 むかし 昔語 かたり 松虫 まつむし 墳 つか

談 桂○亭長丸画

と見える。序文は富士谷御杖の執筆で、次のようである。

○世中のはかなきもの夢にまさるはなし射干玉のやみのうつゝはさもあらはあれふたゝひ思ひめくらせハなきゆめはかりあはれなるものやはあるまことかとみればうつゝ

にあらすあとなしと見ればはかなからすしてそのあれはひかきりなき物をや夢にくさくありといひけむさるこちくしきたくひにはあらすその言みやひたらねと其あらすうつゝならぬにはあらすその言みやひたらねと其ころいと高したきつ瀬のはやりかなる心おししつめ春の日ののとならむ窓にて深くとほしらく見いれむそ此ぬしのほいなるへきゆめかたるちふしれ人とくちさかなかいふめるから人のなまさかしらなる心にならへてよくみよよの人よく見よよき人 文化八年きさらき 御杖しるす

序は二丁で、次いで「総目録」は燈籠と松の図案に目次があつて一丁半、主要なる登場人物を列挙図示する巻頭繡像三丁、次いで「東武十返舎一九」の署名ある松の略画に賛として「生ひしけるくさにかくせとかくれぬは野中にたてる松むしの墳」とあるもの半丁、そして本文に入る。

内題には「絵本昔語松虫墳」とあつて本文、本文部分は、各面十一行で、卷之一は十九丁、卷之二は十五丁半、卷之

三は十八丁半、卷之四は二十一丁、卷之五は二十五丁、卷之六は二十二丁、挿絵あって各冊六〜七丁ばかりである。

卷末に跋文一丁半があつて、次のようである。

○ひをむしの日をくらしかねてつれ／＼なるまゝ鈴虫の古き世にありとしもきかぬことをかいつけぬれハ蜘蛛のいもいとをほつかなくはたおりめの綾にあやしくなむさるハ胡蝶の夢のゆめのやうなるを夢もの語とやなつくへき又松虫の塚をしもとりわきいひ出たれはさもや負すへきよしそはとまれかくまれかはかりのものをも茅蜩のくらしかたき春の日秋津むしのあきの長き夜にはみんなもあらんとて世にもていつるにやおもへへいとおこなりかし
聴雨軒

刊記あつて次のようである。

○繪入新とりかひはや物語 聴雨軒著 全六冊
読本 桂向山人画 近刻
文化八年辛未 四月新刻

- 江戸田所町新道 鶴屋金助
- 大阪大宝寺町 平野屋宗七
- 同江戸堀二丁目 今津屋辰三郎
- 同心斎橋唐物町 河内屋太助
- 同北久太郎町 河内屋儀助
- 同伝馬町 河内屋嘉七

『昔語松虫墳』は、文化八年刊の上方製の読本なのである。

二

『昔語松虫墳』の梗概は、『日本古典文学大辞典』に略記されているが、枚数制限もあつて無味にして簡、ここに再記する。

元弘建武の頃、津の国天王寺の南阿部野に由緒正しい野田左衛門清原氏家という郷土がいた。楠廷尉赤坂義孝の時、その傘下で武功を示すほどの勇士であるが、左衛門には太郎氏安・桂子という二子あり、桂子は傾国の美女で、それによつて物語が多くあると始まる。

氏安八歳の時、母榊病臥、八方手を尽すも甲斐なく、後添を入れることを遺言して死す。帝隠岐流人あつて楠廷尉の義孝に右衛門参加、二子孤独である。同国長柄河辺に長柄長者と呼ばれる豪富あり、当主監物淫楽を尽す。妹楓渡辺某と言う大商人に嫁し一男(増五郎)を生むも、夫病没後野盗に全財産を奪われ、実家に帰る。安井隼太仲介して、楓は右衛門に再嫁。是ぞ野田家此数箇の狂事の有へき端なりけり。楓婦徳を称さる。増五郎は監物の養子となる。

諸国争乱、摂津の大物浦に海賊あり、河内の悪九郎という頭領に桑津大八、石津剛平太両賊従う。右衛門、氏安に海賊退治を命ず。忍者で探ると、大船に悪九郎、大八あり、陸の酒店に剛平太あつて諸事注進すること判り、隼太に五十人の討手を付して埋伏せしめ、氏安は郎従木津源八郎と

ともに酒店に赴き^{てした}党下となることを申し入れる。時に南都の商人船荷多く来ると注進あり、手下の海賊が襲わんと出かけるも、一人の勇士ありて手強しと連絡あり、大八が応援に出る。再度連絡あり、大八も捕わるといふ。機を見て、氏安主従は悪九郎らを斬り殺す。隼太もども海賊成敗して大手柄。氏安は大八を放免する、大八は堺の武士、妻を迎え一女を得るが、窮して娘を棄て、賊となつた者である。
(卷之一)

長柄長者たる監物は、日々歡樂を尽す。築庭の術を氏安に聞く、築庭問答あり。家内の掟正しからず、強盜數十人浸入、安井隼太防戦するも手疵を負い逃亡、監物慘殺され、増五郎見棄てて逃亡、愛妾桜戸を奪い家財も全て盗む。実は隼太が大八と密謀しての企て、隼太桜戸への邪恋を果すためという、桜戸発狂して死す。

湊河の戦いで左衛門戦死、楓悲しんで尼になろうとするが、思い止まる。悪事露頭せざる隼太は、野田家に入入りし楓と通ず。心乱れた楓は、野田家の食客として無為に過す増五郎を後嗣にしようと思謀をめぐらす。(卷之二)

桂子十七歳にして才色兼備、野田家の隣に都より多田勝美義里移り住む、勝美由緒正しく才識ある風流人、氏安と睦まじく往来する。勝美は桂子を垣間見て恋におちいる、桂子の婢女榎を通じて文をおくるも、不義として手にも触れず。放埒な増五郎も桂子に邪恋、酔いにまかせて迫るが

氏安にさまたげられて果さず、召使の杉を買取して仲介を頼む。杉は金に目くらんで桂子を口説くが不首尾、金欲しさに

ほしやほし扱々ほしや扱欲や色は栗飯ひかるおかねを
という秀句を詠んで、醜女の滑稽を演ずる。

勝美、文のおくに

今は唯なみだの河に身を投て死なんとそ思ふみるめな
れは

袖のみぬれて

と書いて送る、亡き母を思ひ淋しき桂子手習いのように

偽のなみだの河のあさき瀬に身をなげつとも甲斐あらめ
やは

と書く。これを榎は返事として勝美に渡す。榎の手引で忍び、わりなき仲となる。増五郎は勝美の忍ぶ姿を見付け、報復を考える。桂子の従妹松女は、木津源八郎に婚し一子源太郎を得る、勝美と桂子の忍び事を知り嫁合そうとするが、戦い止まず氏安も源八郎も留守多く期を得ないでいる。留守中、楓増五郎母子の悪事多く、^{すたい}数代の名家も此時に^{いた}至りて。やゝ家の^{いへ}掟みだれ終には此家亡失^{このいへはろひうせ}なんと家に^{いへ}久し^{ひま}き男女は皆々^{おとこをみな}歎悲^{みなく}しみける^{なげまかな}”という有様である。増五郎は勝美の文を楓に見せ、悪しざまに告口する。楓は隼太に頼み菓子に砒霜班猫を入れ桂子に与える、侍女榎菓子を食して死す、楓仕損じて言ひくるめる。榎の実家遠里小野

村にあり、両親妹悲しめど泣き寝入りである。(卷之三)

楓は、九ヶ月の身重の松女を桂子の密通を見逃したと責める。隼太と増五郎は、桂子を連れ来て共に責める。兩人詫びるが聞かず、隼太は松女を惨殺する。(挿絵には、刃をかみ切った松女の着物の袖が四匹の蛇と化して怨念あるを示している。)

桂子も殺さんと楓はうながすが、氏安の意を恐れる隼太は、追放せよと説く。九死に一生を得て桂子は母の形見の鏡一面持つて家出、勝美の方に赴き、次第を語る。勝美驚き、

松女一子源太郎を秘かに連れ出し、皇都を指して出奔する。

「悪むべきは隼太なり。先には長柄の家を倒し。今亦かく野田が家に災を起す。天何ぞ彼が罪を伏せさらむや。原是楓ゆゑとは言ながら。身を八ツ裂にし。面に唾すとも飽足らぬものなり。亦危きは桂子が命なり。風待草のつゆなりしが。氏安か勇威。克ひとを恐れしむるにより。彼悪輩等手を空しくして。命を奪ひ得さりき。」

隼太は、松女に一子源太郎あるを思い出し、仇敵とねらうを恐れ殺さんとするも果さず、楓と歓楽を尽す。勝美は家財を先に送り出し、桂子源太郎を連れて三・四里落ちのびるが、そこでは家財を持たせた者たちが切り殺され、盗賊に全て奪われている。勝美忙然、ともかく都は六条あたり主従四人(命助かりし池田与三ともに)わび住ひする。

生活に窮し、桂子は兄氏安に詫言せんと考えるが、四条繩手にて忠死を遂げたとの風聞、遂に母の形見の古鏡を黄金

にかえんとする。富貴の人、由緒ある古鏡を見て感じ入り、

黄金を与える。五条あたりで「頭には有馬菅笠をかぶり。黒く染たる布もて面を覆ひ隠し。腰には短かき刀を帯ひ。足には檳榔子といへる物にて染たる。脚半をしめ」た煎じ

薬売の男が桂子に当身して鏡と黄金を奪い、津国への路用に過分なりと姿を消す。内証のこととて桂子泣寝入りする。

隼太は強盗の魁首として悪逆、勝美は隼太を討たんと誓うも貧極まる。時に黄金の投げ入れあり、五条あたりでの借りを返すとある。「扱も彼男は如何なる心にて。一度うはひし金を帰しけむ。あやしとも怪しき亘なり。猶深き謂れ有亘成べし。」(卷之五)

「虫の音も忍ふ友を待ばこそ。言の葉にもかゝるらめ。実々おもひ出したり。古き歌にも。秋の野に。人待虫の声すなり。吾かとゆきて。いさ訪らはむ。此詞や。謡曲とて世にもてはやすが。中に松虫といふ有。夫は今撰津の国阿部野にあなる。松虫墳といふ物を亘のもとにして。作りなせしものなり。」松女葬りて後、墳に松虫生じ、悲しげに鳴く。

歳月過ぎ源太郎十五歳、隼太を仇とねらうも変幻自在にて及ばず、母の墳に詣でて既往を述懐する。時に兇賊三名におそわるも、見事に退治する。源太郎勇あり。

野田太郎討死後、楓は隼太と共に歓楽、一夜松女の怨霊におそわれ懊惱する、増五郎加持祈禱すれど効果なく、あ

る夜松虫数多く飛びめぐり、楓絶死す、松女惨死を彷彿せしむ。松虫は塚に飛び去る。

撰津国神崎の遊里に伊丹某という家あり。隼太・増五郎も遊ぶと聞き、源太郎十六歳身を寄せる。伊丹の遊女梅枝柏木あり、殊に柏木は傾国の美女なり。謡あり、証とす。

「よしさらば絶なばたえね玉柏。たたえなば絶ね吾玉かしはみづの柏の。沈むに浮は袖の白露しらずよこゝに妻を定めすいつまでひとり児の手柏のふたおもてなるいつはりがちな。夜毎の枕。まくら恥かし。いつはりがちな日今は憂身にあきがしは」柏木は源太郎に恋す。源太郎受けず、絶望して自害せんとするを止め、源太郎素性を語る。柏木驚き身の上を語るに、桂子の身代りに死せる榎は姉なりと。榎の死後、貧にせまり苦界に身を投ずるも、父は病死、母は盗賊に殺され、家宝の刀を奪われる、姉女郎梅枝に通う隼太の紋所が扇の中に半月で、母の口に押し入れたる布の紋所と一致し、刀も家宝のものなので母の仇と判りながら、仇を討つに至らずと嘆く。共に力を合せ仇を討たんと誓う、隣室でこれを聞く人あり、善か悪か。

梅枝死後（梅枝が塚ありと）、隼太柏木を口説く。柏木は、増五郎に口説かれていと拒絶、隼太は増五郎を殺害して、柏木を身請する。柏木は身を任せず、源太郎を導かんと計るも、手下の盗賊が柏木に密夫ありとの噂を語るを聞いた隼太は、柏木を殺さんとする。桑津大八それを止め、牢に入れ

て一日一寸きざみとする。柏木瀕死なれど源太郎を案ずる。
(卷之五)

源太郎は計画を勝美に報告、勝美も共に忍ばんと約す。源太郎先に忍び入るも、柏木の牢前にて捕わる。隼太、源太郎の素性を察し、勝美来るを予測し、桑津大八に警備を命ず。盗賊ら盗みに出かけし後、自害せんとする源太郎の前に松女の霊現われ、警備の賊を殺して源太郎を救ひ姿を消す。勝美、与三来り、桑津大八が勝美らを救いし次第を語る。大八の捨てた一女は榎であり、氏安に成敗さるべきを救われながら、桂子から鏡と黄金を奪いしも我なり、桂子と知り黄金を返したと告げ、鏡を返すと共に隼太に対する裏切の責ありと切腹すると。

「善悪の報ふことは影のかたちに随ふか如しとかや」勝美・源太郎・与三は、勝手知ったる屋敷のこととて易々忍び入り、乱酔の隼太を打ち取る。柏木を救出し、止めを刺させる。帰順せる家士に命じ、強盗を全て退治し、めでたし。文和二年十月十七日のことという。敵討落着して、野田家相続を議すに、天王寺西門に庵する如雲法師来り、氏安の遺言とて、詞あり、

明発又為千里前 相思応尽一生期
桂子を妻として勝美に野田家相続せよと。源太郎・与三忠勤、源太郎は傷平愈の柏木と婚し、豊かに暮す。

隼太、楓の亡霊、世人を悩ます、如雲法師、法華経を書

写して塚を築き（経塚という）、怨霊を成仏させる。野田家、多田家栄えて、めでたし。（卷之六）

三

氏安の海賊退治の部分、海賊の手先が海辺に酒店を開いて注進の足場になっているなど、水滸の面影がうかがえないでもないが、読本一般に多い中国白話小説の影響を探索し得ず、和文派の勝った文章にも中国白話文の影響をうかがえず、松虫墳の故事と長柄長者の説話を基盤として、想を樹てた読本のごとくである。

松虫墳については、難波の地誌『芦分船』六一無軒道治著延宝三年刊に、後鳥羽院の時の松虫鈴虫の説話に付会する説が見られるが、『昔語松虫墳』にはその面影は見受けられないので別として、蜀山人の紀行『葦の若葉』（「新百家説林」一所収）に、

○天王寺西門の前を南に行て、阿部野の道にかゝる、右の方の田圃の中に、一もとの松あり、松蟲塚といへる碑をたつ、道の入口に清圓といへる字を刻める碑あるは、此の碑たてし人の名なるべし、此の塚の事さだかならず、難波丸には、古今の序に、松蟲の音に友を忍びてといへることばを、故事に取りなし此野邊の事に作れる謡有るにより、近き世の人いひならはせる成べしとなり、撰陽

羣談には、所傳に云、古ある人二人伴ひて此野を過く、折ふし秋も半にて、月のさやかなるに、松蟲の声面白き方を慕ふ、一人は跡に残りて草の薙にふしぬ、暫の間も帰り来らざりければ、又一人も跡をたつねて爰に來り見れば、草にふして死しぬ、なく／＼土中にうつみて、松蟲塚と名付けて世に伝ふとはいへり、松蟲の音による事古今集の序にたよりて、謡に作りたるによるかとあり、近比の名所圖會には、むかしの官女の塚なるべしといへり、何れにもよしある事なるべし、ふところにもせし、蠟墨もてうつに、松蟲の二字はさやかなれど、塚といふ字は草にかくれて、なかばゞかりなりき、との説がある。

所引の『難波丸綱目』七志田垣与助編画延享五年刊の説に言う「謡」とは、謡曲『松虫』のことであり、同じく『撰陽群談』十七岡田篁志著元禄十四年刊の「所傳に云く」としての引用文は謡曲『松虫』の文章そのままであつて、結局『難波丸綱目』の説と重なる。蜀山人は、「此の塚の事さだかならず」としながらも、この援引の資料から察するに、謡曲『松虫』に付会して松虫塚を理解していたのであろうし、『昔語松虫墳』卷之五冒頭の梗概所引の文章は『松虫』とほぼ同一の文章であるから、聴雨軒なる作者も、謡曲『松虫』と松虫塚を付会した俗伝を念頭にして想を樹てたことは確かである。『昔語松虫墳』卷之六に見

える経塚というのも、『難波丸綱目』に松虫塚と並んで経塚の説が載っているから、『葦の若葉』にも、松虫墳に続いて経塚のことがある。聴雨軒は『難波丸綱目』を座右にしていたかも知れない、梅枝塚の所伝は見受けないが。

長柄長者の説話というのは、長柄村の鶯塚の故事に付会して語られるのが一般のようで、『芦分船』巻之六に記録され、更に浄瑠璃として『芽源氏鶯墳』一鳥・黒藏主・阿契・応律等合作宝曆九年三月大阪豊竹座上演があり、〃信義・節操を主題とした美談〃〔選撰古書解題〕水谷不倒著〕を収録した前期読本『四方義草』五其窻子寛政五年刊の巻之四〃占部孫太鶯塚を築く〃に恋物語として著録されている。『四方義草』の話は、この本の性格から推して民間流布の説話に近いものであったかも知れない。そして、文化八年の時点までには、他にあまり著録されたものあるを知らない。『昔語松虫墳』が出版されたと同じ文化八年、同じく上方の書肆から『長柄長者黄鳥墳』六栗杖亭鬼卵という読本が出版されており、鶯塚と長柄長者に付会した仇討話が見られる、長柄長者の息女が梅枝となっていて、『昔語松虫墳』巻之五に出てくる遊女梅枝と同名という共通点があるけれども、両者の間に相関関係があるとは思われないのである。鬼卵は、鶯塚の故事に付会されている長柄長者の説話を素材に、仇討話としての『長柄長者黄鳥墳』という読本作りを構想したのであろうし、この読本がこれ以後は

基本となって、歌舞伎〔昔語黄鳥墳〕天保三年五月河原崎座上演など人情本〔鶯塚千代廻初声〕初・二編松亭金水文政三年刊、三・四編山々亭有人明治二年刊〕実録〔所見本は、『長柄長者黄鳥墳』の転写本に近いものである。〕などへと展開したごくである。一方、聴雨軒なる作者は、松虫塚の故事に長柄長者を付会して、読本作りをしたのであり、とすれば、長柄長者の説話と謡曲『松虫』の構想が、『昔語松虫墳』のどこに反映しているかということが次の問題となるであろう。

鶯塚の故事に付会する長柄長者の話と、『昔語松虫墳』に出てくる長柄長者には全く共通項が見られない、ただ長者というだけのことである。謡曲『松虫』の構成は、『撰陽群談』所引のごとき話に続いて、友の霊現われて述懐するという極めて単純な構想であってみれば、長柄長者の興亡と野田家のお家騒動話と源太郎の仇討話を、勝美と桂子の恋愛譚で結び付け、松女の怨霊出現で怪奇性を添えるという複雑な展開を見せる『昔語松虫墳』のどの部分に反映しているかを探るのは困難である。強いて言えば、二人のうち一人の友が松虫の音を慕っている間に、草の薙に臥していた一人の友が死んでいたというところ、楓子と松女ともに楓らに責められながら松女のみ責め殺されてしまうというところに面影あるごとくであり、死せる友の霊出るところ、松女の怨霊がさまざまな怪奇を示すに通じていると

も考えられ、そこに『松虫』の読本的反映があるごとくでもある。

と言うより、松虫墳の存在を知り、それを謡曲『松虫』とを付会する俗伝を知っていた聴雨軒が、それを着想の原点として、長柄長者という長者伝説を混融しながら、文化八年という時代における読本という文学ジャンルの小説作法に従って、構想を拡大していったというのが『昔語松虫墳』であると説明すれば、一層正確なのではなからうか。

『松の葉』五秀松軒元禄十六年刊所収「松虫」も、松虫塚とのつながりが指摘され、長唄にも「まつむし」があるなど、俗曲の松虫塚と縁あるものが見られるが、『昔語松虫墳』との間には関係なさそうであり、読本の素材を提供している浄瑠璃・歌舞伎にも実録類にも、その素材原を発見し得ないでいる。

謡曲『松虫』と長者伝説という素材があれば、『昔語松虫墳』程度の仇討話、お家騒動話、恋愛譚であったなら、当代の戯作者としては充分構想し得たのもあろうか。

四

当代戯作者という、聴雨軒とはいかなる戯作者であったのであろうか。

手近なところで、『日本小説書目年表』付載の「日本小

説作家人名辞書」には、「伝未詳」とあるのみ、近時の『国書総目録』の「著者別索引」にも『昔語松虫墳』だけの作者として載るのみである。

ところが、『享保以後 大阪出版書籍目録』を検するに

○昔語松虫墳 六冊

作者 石津平助

板元 河内屋嘉七（伝馬町）

出願 文化七年八月

許可 文化七年十一月廿八日

とある。『昔語松虫墳』の作者は、石津平助だといふのである。石津平助とは、浪速は曾根崎村の住人である石津亮澄のことであり、とすれば和歌、狂歌をはじめ国学関連の著作が数多くある浪速の文人である。

浪花の文人と言えば、水田紀久博士がおくわしいのでお尋ねしたところ、昭和三十七年十二月一日稿了の未発表の稿本『浪華人物誌の系統と諸本』のコピーをお示し下さった。浪華人物誌研究の一環として、『文化浪花雅人録』の編者たる石津亮澄について詳述されたものであるが、水田氏の御好意に甘えて、それをそのまま再録させていただくこととする。

○『文化浪花雅人録』の編者「石津屋平助」は歌人石津亮澄として知られている。通称石津并輔。富草屋（舎）また米居と号した。安永八年十月十三日、摂津西成郡曾根

崎に生れた。はじめ尾崎雅嘉に師事、のち本居大平に入門して古学を修め、学成るや唐物町二丁目に帷を垂れたが、門弟は頗る多かつたといわれる。その名は『浪華人物録文化改正』をはじめ文政六年版『續浪華郷友録』・『浪華金欄集』等にも収録されているが、文政七年版『新刻浪華人物誌』で「亮澄」を「亮證」と誤ってより、天保元年版『浪花當時名士録』・天保八年版『續浪華郷友録』等には、いずれもそのまま踏襲されている。天保十一年二月九日歿した。年六十二。墓は契沖とおなじ高津餌差町圓珠菴にある（墓碑銘「大阪訪碑録」・「大阪人物誌」・「近畿墓跡考大阪之部」等所収）。亮澄は和歌狂歌に関する十数部の編著を遺している。はじめ『柳翁狂歌類題』・『狂歌題林集』等を編んだが、

のち古代中古中世の和歌を類題別に編んだり、『萬葉類葉集』・『萬葉二聖集』・『屏風繪題和歌集』・『新撰はし書ふり』・『中古贈答和歌部類集』・『袖中夫本集考』・『夫木和歌集古調』先人の著述を校正出版するなど、（下河邊長流『晩花和歌集』・契沖『漫吟集類題』・同『和歌拾遺六帖』・安藤爲章『紫家七論』・賀茂眞淵『源氏物語新釋惣考』・楫取魚彦『古言梯』、歌学の普及に努めた。河内屋嘉七より出版を願ひ出たものも、『昔語松虫墳』・『袖中大和詞大成』・『和歌新呉竹集』等数部ある。また『徒然草新釋』・『金毘羅山名所圖會』・『富草屋雜録』（寫本）等の著述や『年代便覽』のよう

な必携式のものも編んでいるが、概してその編著には通俗的啓蒙書が多い（『享保以後大阪出版書籍目録』・『大阪名家著述目録』・『東區史人物篇』・大阪府立図書館蔵書など）。かれ石津亮澄に人物誌の編著があつても、不思議ではないであろう。（なお石津亮澄については飯田正一氏に「石津亮澄とその歌集」と題する論考があるが（關西大學國文學會雜誌「國文學」第二十八号・昭和三十五年一月）、こと本書に關する限り、考究は疎略と言わざるを得ない。）

五

『昔語松虫墳』の出版された文化八年は、石津亮澄三十一歳、それまで『萬葉二聖集』二文化元年刊、『掌中仮名字例』一文化六年刊（『國書總目録』による。）、『柳翁狂歌類題』一文化六年刊（『享保以後大阪出版書籍目録』による。）などの編著を出版しているに過ぎない若き馳け出しの学者であつた。その亮澄が、『昔語松虫墳』という、亮澄にとっては場違いの感ある読本を執筆しているのである。

文化八年と言へば、文化四年からの読本出版のブーム現象（注二）が、一種の鎮靜化に向つてゐる時期で、年間の出版部数が十数部という平常値を示している頃で、ブーム現象時代に明確になり始めた江戸書肆の上方書肆に対する

優位性が、ここに至って定着した感のある時期である。この時期の上方書肆における読本出版の状況を見るに、速水春暁齋などによる絵本ものと過渡期的痕跡を有する手塚兎月の稗史もの、江戸前の読本作法を充分に意識した栗杖亭鬼卯の稗史ものなどが出版され続けられていると共に、川昌房〔信夫摺在原草紙〕五文化五年刊、『金鱗化粧桜』六文化九年刊などの作者、徳二良・采義、高津新地人、文亭箕山〔敵討水上霜〕六文化六年刊、『絵本撃仇談』六文化六年刊カ未見人〔享保大版出版書籍目録〕によるVなどの作者、京町堀両国丁住〕月花亭東漁〔小春紙治異本椿生譚〕三文化五年刊、『桜木物語』五文化九年刊などの作者、中西五郎右衛門、河州佐田人、鉄格子波丸〔復讐葺牙雙紙〕八文化七年刊などの作者、木津屋周蔵、大阪立売堀の鉄物商、五島清通〔鶯狩宇治奇聞〕六文化十年刊、『伊達模様和漢の染分』五文化十年刊などの作者増田勘蔵、大阪東町奉行同心などという、結果的にはせいぜい二・三作の読本しか執筆していない作者たち、職業的には多彩と察せられるけれど伝未詳に近い、数多くの敢て言えば素人読本作者の稗史ものを出版している。山東京伝と曲亭馬琴を軸として、振鷺亭、小枝繁、感和亭鬼武などなど、次から次へと新しい読本作者を育成している江戸書肆に対抗して、劣勢覆いがたいた上方書肆も新しい読本作者の発掘に努めていたのである。そのうちの一人として、聴雨軒こと石津亮澄がいたのであると思われる。

前出、『昔語松虫墳』の巻末刊記のところに、¹¹新とかひはや物語¹²なる六冊の絵入読本の近刊予告があった。『昔語松虫墳』に続いて、国学を学んだ亮澄には自家薬籠中の素材である『とりかへばや物語』を利用した読本を構想し、書肆側もその出版を期していたのであったろう。しかし、現在その本あるを知らない、『昔語松虫墳』の評判必ずしも香ばしからずで、出版するに至らなかったのもあろうか。上方書肆の、新人の読本作者育成は、石津亮澄においては失敗したことになるのである。

かくして、読本作者たることに想いを絶った聴雨軒は、それ以後石津亮澄として通俗啓蒙的なる著作をものする国学者、歌人として、浪速にその身を樹てたのである。

注一 拙編『読本の世界―江戸と上方―』所収『江戸読本の展開―文政年間』参照。